

礼節の国

私が日本を初めて訪れたのは、大学生の時でした。

パリの大学に通っていた私は、東洋の、とくに日本の文化に強い興味をもち、世界一周の旅の最後の目的地に、日本を選びました。

その中でもヒッチハイクをしながら曹洞宗の大本山、永平寺を目指したことは旅の最大の思い出です。

フランス人の私を、恥ずかしそうな笑顔で自分のクルマに乗せてくれた人々の優しさ。

圧倒的な威厳を静けさの内側に隠し、私を迎えてくれた永平寺の風景。

私と日本との出会いは運命的なものだったのです。

今、私はゴディバ ジャパンのCEOとして愛すべきこの国で働いています。

私は日本という国から多くのことを学びました。

30年来続けている弓道もそのひとつ。

日本に古くから伝わるこの武道は、実に驚嘆すべき教えに満ちています。

正しい射法を行えば、矢は必ず的にあたるという考え方、

矢はあてるものではなく、あたるものなのだと教えられました。

このシンプルで奥深い教訓は、私のビジネスの哲学となりました。

武道は全て、礼法を重んじています。

いや、武道に限らず日本は礼節の国だと感じています。

恩師、世話になった人、地域の先輩、親族の長者などに対する敬意と挨拶を忘れません。

今でも地方を旅すれば、見ず知らずの外国人である私に、

下校中の生徒たちは帽子を取ってお辞儀をしてくれる。

その風景はしみじみと美しいものだと感じました。

しかし、今、私は心配しています。

世界中を巻き込んだ新型コロナウイルスは、

この日本の美徳さえも損なおうとしているのではないかと。

ロジスティックに携わる人々や、あろうことか医療従事者の家族までもが、

心ない言葉をあびせられたり、他の県から来たクルマに卵が投げつけられたり。

私はそんなニュースに接するたびに胸が痛みました。

この国に限って、そんな出来事は起きないだろうと固く信じていたのですから。

新型コロナウイルスの悪さは、人々の心さえ病ませてしまうところなのかもしれません。

この先にやってくる、ニューノーマルと言われる社会で、

この国の美しい礼節はどう変容していくのでしょうか。

できるなら、自ら恩人を訪れて、挨拶ができなかったことを詫び、旧交を温める、

そんな美しい礼節の国、日本が戻ってきて欲しいと、心から思っています。

負けないで

ゴディバ ジャパン CEO ジェローム・シュジャン



また、ゴディバでお会いしましょう。